

不可抗力

ライブラリ

A男とB子

A男は関係先の B子から愛想よくされていたが、A男の年齢は高かったため、B子から愛想よくされる理由が分からず、意味が分からないでいた。挨拶するにしても普通にしてほしい、と思っていた A男は、ある時から B子の挨拶を無視するようにした。

B子は同僚女性から、「A男は話しやすい人だよ。あんたも話してみるといい」と言われていたので、「なんで私は無視されるの？同僚と私の違いは若さだけ。若いとダメなんだ。意味が分からない…」と気落ちしていた。

A男

A男は赤ん坊の時に一日六時間放置されていた。オギャーと泣いても独りにさせられていたため、一般よりも無視される耐久力が高く、無視される衝撃が分からないところがあり、場合によっては平気で人を無視することがあった。

愛想よくしただけで犯罪に巻き込まれる危険性が分からないのは、B子が社会に出て間もないためと気付いた A男は「愛想のよさに意味はない」と分かり、謝罪のために B子のところへ行ったが、B子はすでに退職していた。

B子とC男

「なんで…。なんで私は受け入れてもらえなかったの…。私は取るに足らない存在…」と思いながら、B子は新しい職場で過ごしていた。関係先の C男がよく話しかけて来たが、意味が分からず、ある時無視を決め込んだ。

いつしか B子は A男と同じことをしていたが、気が付かないでいた。

C男とD子

C男は B子から離れた。

C男は同じ職場の D子が困っていたので助けた。昼も近かったため、D子は「食事を摂りましょう」と言ってロッカー室へ着替えに行った。

文脈からすると「一緒に…」だが、「個別に…」の可能性もあったため、C男は一人で食事をした。

ロッカー室を出た D子は C男を探したが見つからず、置いてきぼりにされた寂しい気持ちのまま独りで食事をした。

C男

C男は小学生の時に、容姿や、偶然の手の接触で「気持ちが悪い!!」と言われるイジメを日常的に受けていた。

「ヤダ、待ってたんだ。『個別に』という意味だったんだけど、ここで断ったら気まずいから、『仕方なく一緒』に食事するか。なんか待たれるって気持ちが悪いな」と D子に思われることを極度に恐れていた。

C男をイジメた女子生徒と D子は別人にも関わらず、C男は逃げるしかなかった。

C男は幼少から「言うことを聞かないと置いて行くぞ」「裏山の暗闇に独りぼっちにするぞ」などと、「置いてきぼり不安」を与えられながら育ったが、ある程度は心の問題を解決していた。

C男は、人からされたくないことを D子にしてしまったことが頭から離れず、苦悶の日々を送った。

D子は同僚男性と一緒にになった。C男は退職した。

C男は技能が高く、世界を変える活動をしていたが、社会に頭角を現すことなく生涯を閉じた。

誰が悪いわけでもありません。どうしようもなかったのです。

最終更新日 2026-10-07

[ライブラリ](#) [まこと](#)